

<東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞>

「大人に近づくその前に」

二本松市立二本松第三中学校 3年 小林 昊大

中学2年から3年にかけて、僕は親に何でも反抗していた時期があった。我が家は自営業で、常に親が居る為、安心出来る反面、うっとおしさも感じていた。正月が明けると、毎年確定申告の時期が来る為、消費税や所得税はどのくらい来るのだろうといつもソワソワしている。それでも正直、自分事ではないと思い、どこか他人事であった。

ある時、進路の話をして揉めた時に母から「あなたはもう一度世の中の仕組みを知っておいた方が良いと思うから20才からの生きていく為のシミュレーションしてみたら？」と言われ、少しずつ調べていく事となった。

六法全書の日本国憲法第30条には、「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負ふ」とあった。つまり、子どもだから支払う義務がないとは、どこにも書いていない。子どもでも利益が出れば所得税の支払いが発生する。(税理士ドットコム参照) あ然とした。中学生でまだ遠いと思っていた納税はそんなに遠い話ではなかった。現に、消費税(買い物で生じる)はレシート見れば8%もしくは10%必ず支払っている。法律で納税義務がある事は分かったが、なぜ必要なのか、とても疑問だった。自分で働いたお金を見ず知らずの人へ使うというのが、どうにも引っかかったからだ。

視点を切りかえ、今度は使い道目線で考察してみる。税金は社会保障と密接につながっている。僕が2才8カ月の頃、東日本大震災があった。その日母は申告に行っていて、僕は昨年亡くなった祖父と一緒にいた。テレビで見る家族で旅してきた岩手や宮城の海、福島の色は一変していたという。暗い海に炎が出ていた光景は親達はずっと覚えている。だから、時間はかかっても、復興していくことが皆の心を和らげる事に、ほんの少しでも希望につながったのかもしれない。あれから12年、だいが橋

や道路や、建物が復旧して景色も変わってきた。つい最近まで世界に混乱と悲しみを招いたコロナウイルスの対策にも、税金は使われている。自分はきっと、今まで恩恵を受けてきた側だ。知らず知らずの内に守られていた。親にも反抗していたが、知らずに守られている、という事が、実はとてもすごい事なんだと、今気づいた。納税義務の事を調べ、使い道の事を調べた事で、自分の中に生きていく事への一つの責任感が出来た様に感じている。自分は今未熟だが、年老いた今でもなお、可愛い孫だと言ってくれる母方の祖母、暑い中汗を流して仕事をして、納税しておじいちゃんからの店を守り、頑張っている父、ケンカもするが支えてくれる母、これから成長する弟が安心出来る様、自分の意志でしっかり物事を判断し、経験して目指す事に、近づける様、精進して、これからの納税が少しでも社会への恩返しとなれる様、今から自立へとつなげていきたいと思う。僕が大人になる為の一步は、ここからだ。